
月の詩

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月の詩

【著者名】

N2256K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

月のことを詠った六つの詩です。

第一章

夜の雨の後

強く長い雨が降るまま 夜になってしまったその時

やっと雨が止んだ それで静かになった

雨の喧騒が消えて静寂が戻り

空の雲は消えて晴れ渡った空が見えてきた

夜の空は暗く 昼の青い美しさは何処にもない

晴れた夜空には 今は星もない

星もなくただ黒い帳がそこにあるだけ

けれどここに何もないわけではなく 美しいものがそこにあった

それは月 一つの美しい月がそこにあった

黄金色の満月が優しい光を放つて

それで雨の後の夜空を照らしていた

夜空を照らす優しい光 黄金色の優しい光

雨のおかげで冷めきってしまった空の中に浮かんでいる

その優しい満月があった

月は何も言わずに清らかに冷めきった夜空を照らしている

その夜空の中の満月を見て それで思ひことばとこえば

黄金の優しい光の中この身を漫していくたい そのことだった

今はまだ黄金色の穏やかな世界の中で夜を楽しみ

そうして時を過ぎしたい

今はそれだけ それだけでいい

たつた一人でも過ぎていていい この夜の優しい光の世界の中こ

第一章

三日月

満月が欠けていき

一田消えた月がまた出て來た

今度は三日月だった 黄金色の三日月が夜空にあつた

満月とはまた違つた姿を見せて そこに浮かんでいる

それは同じ月だけれど姿が違つ 見えるものも違つてゐる

満月とは違つ けれど決して嫌いではなかつた

三日月には三日月の美しさがある それがある

三日月を見てそれを思つ

あの月に乗れたら 子供の時はそんなことも思つた

それができないとわかつても それでも

そこそこ見られるものは同じ 同じ三日月

それを見て今も思つ

満月とは違う美しさを見せるあの月に乗れたら

若し乗れたら その時は何をするのか

ただひたすら揺れたい 三田円の上で

幻想の光の中で揺れたい 夜の帳の中で

もう思つていた子供の頃 三田円を見ていたあの頃

あの頃と見ているものは同じ 変わりはしない

だから今も思つ 三田円を見ながら

2009・12・1

第三章

昔のこと思い出した。何年も誰にも言えなかつたことを嫌な思い出も

そのことを思い出した夜

振られて裏切られて、そのことをずっと言われていたことを

そのことを思い出した夜

辛さと痛さを思い出して、あの時の傷がぶりかえす

そんな夜に一人外に出て

見上げるとそこには月があつた

黄金色の半月がそこにあつて

半分だけ優しい光を見せていた

あの半分は何処にいったのか、それは見えない

半分は輝いていて半分は闇になつている

その時思つていた自分の顔と同じ

辛さと痛さに堪えているのが闇で、それを克服しようとしているのが光

その一つに分かれていたあの時の顔

円は今は半月だけれど

次第に満月になつていく

欠けていつも新月からまた満月になる そうなれば同じ一ヶ月

満月になれば闇はなくなる 辛くて痛い過去も忘れられる

そうされちくれるのと同時に 時がせりあつちくれる

なら円と同じように 克服してしまおつ

闇のこの辛さと痛みを克服して満月になつ

そうなればいい 満円になればいい

半月を見てそれがわかつた夜

辛とも痛ともまだこの身にあるけれど 心にあるけれど

満月になつて克服しよう この辛さと痛みを

何もなくて　何も見えなくて

時間だけが空虚に過ぎていく　ただひたすら過ぎていく

そんな時間を過ごしていく　気付いたその時にはもう

月が上に昇っていた　月が夜空に輝いていた

それまで何も見えなかつたのに　何も感じなかつたのに

月は見ることができた　感じることができた

空虚な時間はそれで終わって　月が僕に挨拶をしてくれた

それまで何もなかつた僕が　何もわからなかつた僕が

月のその優しい光を見て　その穏やかな光の下で

ふと何かが見えた　何かを感じた

それは何かといふと　最初に見えたものは

月の優しい光　その青く静かな光

その光を見ながら感じていた　その優しさを

何も見えなかつた僕に見せてくれて 感じをさせてくれて

その月の光の優しさを感じていた 夜の世界の中で

空虚な時間は終わり 優しい時間がやつて來た

その世界の中で今は 静かに見えるものを見ていた

2009・12・14

第五章

月に映るもの

月に見えるもの それは何か

見えるものは何もない その中には何もない

しかし今見えたものは 踊る女の子の姿

白い月の中で ひらひらと踊る女の子

音はないけれどその音の中で踊る その女の子

女の子は月の中で踊っている 満月の中で

それがまるでスポットライトの様に そこで踊っている

その娘を見て 誰かに似ていると思った

それはあの娘 僕が想つてゐるあの娘

あの娘が踊っていた それが見えた

あの娘は誰かに見せたいのか 月の中で踊っている

それを見て僕は 彼女への想いをそこに見た

何故彼女を今見ているのか それがわかつた

月が見せてくれたもの あの娘への想い

踊る彼女はまさにそのもの 僕の想い

それが今月中で静かに 踊り続けている

2009・12・14

第六章

疲れ

疲れが溜まり 何もできずにいて

それで終わってしまつ そんな日もある

そうした日には 何をするのか

夜までそれで過ごして それで月を見て

ただそれで終わる それだけで終わる

月の光を見て 夜を見て

それだけで終わる ただそれだけ

一日の終わりには悪く 何もできなかつた

何もできず やつても納得できず

それで終わり 後悔だけが残る

それでいい筈がないのに 納得できないのに

それでも上を見上げて その月を見れば

何か救われる 何故か慰められる

月を見ただけで　たつたそれだけで

それが不思議で　やりきれない一日の終わりなのに

それでも胸が落ち着いて　癒された気持ちになれる

その癒しを感じて　今は休もう

また明日がある　明日になればまたできる

月を見ながら思つ　明日のことを

そうして眠りに入り今は　全てが終わる

ただそれだけで終わって　それで眠つて

それで月に挨拶をして　眠るだけ

2009・12・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2256k/>

月の詩

2010年11月14日10時10分発行